

University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2022(令和4)年 9月20日発行 [隔月刊]

[特集] 大学におけるVRの可能性

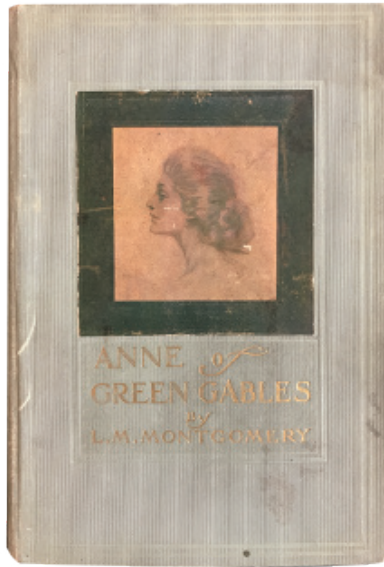
大学時報

NO.406
2022. **09**

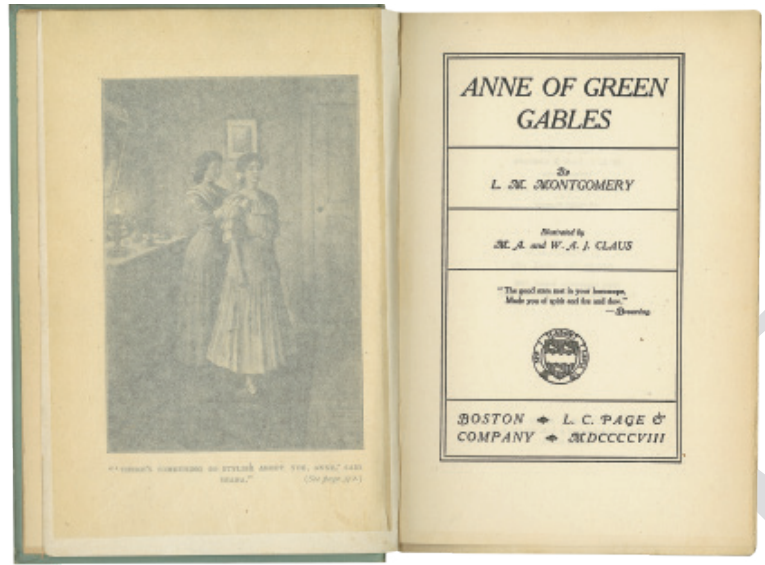


日本私立大学連盟

東洋英和女学院大学



『Anne of Green Gables』
(L. C. Page, 1908)初版本の表紙



標題紙には物語のはじまりとして
ブラウニングの詩が掲げられている



翻訳書『赤毛のアン』の表紙

L.M.Montgomery『Anne of Green Gables』の初版本

この本を翻訳し、『赤毛のアン』として日本ではじめて紹介したのは、東洋英和女学校(当時)の卒業生・村岡花子である。村岡はほかにもマーク・トウエインの『王子と乞食』、エレナ・ポーターの『少女パレアナ』、チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』等多くの本を翻訳し、自身も童話

姿はまさしく、本学院の建学の精神『敬神奉仕』のもと、本大学が「英和スピリッツ」として掲げて目指す「確かな信念を持ち、自分の力をいかして、社会のなかで他者とともに生きていける人」を体現している。

やエッセイ等様々な著作を残した。また婦人運動への参加、ラジオ番組で子ども向けニュースコーナーを担当するなど多方面で活躍した。ご関心をお持ちくださる方は、本学院のWebサイトや孫の村岡恵理著『アンのゆりかご』、村岡花子の生涯』(新潮社 2011・9)、またそれがドラマ化された『花子とアン』(NHK連続テレビ小説・2014年放送)をご覧頂きたい。

1903(明治36)年に給費生として入学、卒業までの10年間で培った英語をはじめとする様々な力で、その後の人生を切り拓いていった村岡の

1952(昭和27)年に三笠書房から出版された翻訳初版本の後書きに「この訳業を麻布の丘の母校にこもる若き日のおもいでと、今そこに学びつつあるわが心の妹たちにささげます」と記されている。村岡がこの翻訳作業をしたのは太平洋戦争中のことであった。変化が激しく、複雑性が増し、確実な将来予測が困難な時代において、本学で学ぶ学生たちに、村岡のように強く希望をもって歩んでほしいという願いとともに、これら資料は大切に保管し、永く伝えていきたいと考えている。

大学時報

2022.09 / NO.406

CONTENTS

だいがくのたから 東洋英和女学院大学

大学点描 武蔵大学

巻頭言 武蔵大学 高橋德行

視点 時代に媚びず 森本あんり

座談会 大学における修学支援―修学支援新制度の成果と課題―

増谷文生 / 富田宏治 / 前澤暁 / 矢古宇克昌 / (司会) 大谷奈緒子

特集 大学におけるVRの可能性

Metaverse時代に向けてVRの英語教育への活用例 斎藤裕紀恵

大学病院の感染症診療病棟におけるVR 高橋雄一

VR系教材開発の事例紹介 岡田義広

VRで伝えるキャンパスのリアルと魅力

―創価大学広報の活用事例から― 岩城健児

リアルとバーチャルが融け合う拠点

―東京大学VRセンターの取り組み― 雨宮智浩 / 相澤清晴

VR技術を活用した理科学習の教材開発 野原博人

ずいそう 明るく生きる 佐々木新一

小特集 東京2020オリンピック・パラリンピックと大学

共生社会の実現に向けて「ともに」 高松理沙

平昌2018大会から東京2020大会までのボランティア育成

―全国外大連合の成果と今後の展望― 朴ジョンヨン

梅五輪プロジェクトの挑戦

―地域や企業との連携による課題解決の実践― 鈴木貴久

90

82

74

72

70

64

56

50

44

38

34

32

16

10

表紙：クレマチス

キンボウゲ科センニンソウ属の総称。200種以上が知られ、さまざまな色や形状の花があります。写真はロウグチという種で、濃い青紫のベル状の花が咲きます。丈夫で栽培しやすく夏から秋にかけて繰り返し開花することも特徴です。すっきりとした気品のある姿は国内外で高い人気があります。

*表紙デザインでは教育・成長・向上を植物になぞらえ、1年ごとにさまざまな種・葉・花・実を紹介します。今年度は花のシリーズです。

96

学生プロジェクトの活動とレガシー

―早稲田大学オリパラ学生プロジェクトVIVASEDAの活動について―

江川武彦

寄稿 伝統芸能の伝承者育成 氷見谷直紀

私の授業実践〜教育現場の最前線から〜

体験型で援助を学ぶ 川口智恵

明日への試み 追手門学院大学文学部

人文学の多様な学びを追究 西尾宣明

加盟校の幸福度ランキングアップ《作家と大学編》

宮本輝ミュージアムと追手門学院大学 真銅正宏

乱歩の生きた空間で大衆文化を学ぶ 金子明雄

文化の発信地としての「文学の家」 西尾昌樹

クローズアップ・インタビュ―

元ラグビー日本代表、コベルコ神戸スティーラーズアンバサダー

大畑大介さんに聞く (聞き手) 脇浜紀子

新会員代表者紹介 国際武道大学／西武文理大学／東京歯科大学

新学長紹介 跡見学園女子大学／京都精華大学／東京国際大学

執筆者・出席者のご紹介(掲載順)

私大連ニュース

編集後記

136 135 133

131 130

122

120 118 116

114

110

106

大学点描



武蔵大学

ゼミの武蔵

知と知の摩擦

互いに思考を戦わせ、摩擦を起こす。

ただ「知っている」のではなく、その摩擦から
新たな可能性を生み出そうとする

“動的な知”のことを、私たちは「知性」と呼びます。

武蔵の学生が、1年次から経験するゼミ。

それはあなたの知が、誰かの知と摩擦を起こす4年間です。

ときには、出口の見えない議論が延々と続くかもしれません。

教員と意見が対立し、激論になる瞬間もあるでしょう。

しかしそうした数々の刺激によって、

あなたの知は揺り動かされ、活きた知性へと進化するのです。

想像以上に熱く、濃密な4年間を約束する武蔵のゼミ。

真に活かすための知性と可能性を、育んでいきます。





武蔵大学が重視する「ゼミ」の目的は、
周囲の学生との知識や思考の違いを認識した上で、
新たな考えや課題解決策を創造していくこと。

ここに「知と知を摩擦する」
武蔵のゼミの真髓があります。

NEWS

2022年4月、新たに 国際教養学部 開設

世界の現状を見据え、英語でリベラルアーツ&サイエンス教育を行う国際教養学部を開設。武蔵大学の学位に加えロンドン大学の学士号取得もめざすパラレル・ディグリー・プログラムを履修できる経済経営学専攻と、高度な語学力の養成と世界を多角的に考える力をつけるグローバルスタディーズ専攻の2つの専攻で世界水準の学びを徹底し、グローバルリーダーの育成をめざします。

武蔵のゼミを知るキーワード

4 年間

12 名の
少人数形式

400 以上の
豊富なゼミ

学びを
広げる +51 ゼミ

成果を
発表する 4 舞台





外観



楠テラス



ラーニングcommons



グループスタディールーム

学びと協働、学部を超えてディスカッションする場

新棟11号館オープン

2 021年12月新棟「11号館」が竣工。地下1階地上5階建てで、ラーニングcommonsやグループスタディールームなど、いつでも自由に学べる環境を整備しました。1階の楠テラスでは、勉強の合間にオープンカフェのような気持ち良い雰囲気の中で、自由にくつろぐことができます。また、3階のラーニングcommonsはソロワークブースや少人数で話し合いができるコーチングブースをはじめ、勉強会や発表の練習などに活用できる施設です。

4階のグループスタディールームは授業外でのディスカッションやプレゼンテーションの練習などに利用できます。大学11号館は授業のない日曜日や祝日も開室し、さまざまな学生の主体的な学びを支援しています。

建設概要

【名称】武蔵大学11号館(2021.12竣工)

【延床面積】3139.70㎡

【収容施設】教室、ラーニングcommons、グループスタディールーム、教授研究室など

University Current Review

大学時報

2022.09 / NO.406



次の100年に向けて

高橋 德行 武蔵大学学長

2022年に武蔵学園は創立100周年を迎えた。新学部である国際教養学部には101名が入学し、次の100年に向けての第一歩を力強く踏み出すことができた。第四次中期計画もスタートし、その中には「ゼミの武蔵」の伝統と実績の上に立ち、第二次中期計画から推し進めてきたグローバル化への取り組みに磨きをかける。さらに文理の壁、学部の別を越えたりベラルアーツ&サイエンス教育に力を入れ、次の100年の礎を築くことができるグローバルリーダーを育てたい。

時代に媚びず

森本 あんり 東京女子大学学長

1. 「こはい先生」

昨今はどこの大学も広報に力を入れている。その努力はときに痛々しいほどだが、新たに創立されたばかりの大学なら、自らの存在を世間に知ってもらうのはいつそう重要なことだろう。そこへ新聞や雑誌などのメディアから取材が来れば、願ってもないことに相違ない。

だが、104年前（大正7年）に創立された東京女子大学は、必ずしもそうは考えなかったようである。往時の雑誌『主婦之友』によると、取材に訪れた記者は学長にさんざんな迎えられ方をした。まず、記者の名刺を見るなり、「今日あたし忙しくつてね、ゆつくりお話できませんわ」と一撃。甚だ芳しくない第一印象の後、オズオズと廊下を歩いてゆくと、靴音が高いといつては叱られ、図書閲覧室

のドアを閉めようとすると、「涼しいから開けてあるんです」とまた叱られる。実に「こはい先生」であった。

この学長とは、初代学長の新渡戸稲造とともに大学の実質的な運営責任を担った安井てつ（第2代学長）のことである。世間の目にどう映るかを気にするより、まずは自分に託された学生たちの学びを徹底して守り助ける、という気概に満ちた対応であった。思わず気圧された記者も、その凜とした教育姿勢に感じ入ったらしく、出来上がった記事は各所に諧謔かいぎやくを忍ばせつつも、全体としては好印象に綴られている。

東京女子大学は、創立時から一貫してリベラルアーツ教育を掲げて実践してきたキリスト教主義の女子大学である。すでにこの一文の中に、時代への挑戦がいくつも含まれ

ている。そもそも、文部省(当時)の設置認可としては「専門学校」という位置づけであったにもかかわらず、はじめから「大学」を名乗り、その実質的な正統性を主張していること。当時の女子教育に対する社会的要請が良妻賢母を育て職業実用に役立たしめることであつたにもかかわらず、それとは明確に一線を劃^{かく}して独立した知性を強調するリベラルアーツ教育を掲げたこと。そしてその挑戦を下支えする精神的な土台として、キリスト教主義を選択したこと。

こうした姿勢を貫き通すことは、戦前戦中にあつてはけつして容易ではなかつただろう。敵国のキリスト教諸教派により設立されたという大学への風当たりは強く、第3代学長の石原謙は大学のチャペルを供用せよという軍部からの圧力に抗し続けねばならなかつた。

2. リベラルアーツの反時代性

だが、その伝統を受け継ぐ学長として今日わたしが特に強調したいのは、リベラルアーツ教育という理念がもつ本来的な反時代性である。

日本で「リベラルアーツ」などというカタカナ語が通用

するようになったのは、ごく最近のことである。大正時代には、そんな言葉は影も形もなかつた。当時の東京女子大学でも、明示的にこの言葉を使ったのはアメリカの高等教育事情を知っていたA・K・ライシャワーだけである。ただし、前述の安井てつは学長就任時の抱負として、「当校に Liberal College の性質を有たしむること」を掲げ、その説明に「職を得させんがために専門の教育を与えるのではなく、良き目的のために、その知識を活用しうる人……いかなる仕事をも忠実に行う人」をつくる、と付け加えており、十分にその意味内容を理解していたことが窺われる。

時代の要請は、ますます専門職の育成へと傾斜を強めていった。戦時中は特に、徴兵されて不足する男子専門職を代替すべき人的資源として、女子の専門職業教育が強く求められた。東京女子大学はこの要請にも頑として従うことがなかつた。「知識より見識、学問より人格、人材より人物」と語つた新渡戸稲造の建学精神を受け継いでのことである。

そもそもリベラルアーツは、時代ごとに変遷する国家の政策に即応するような教育ではない。その近代的な原型

を生んだアメリカの高等教育史では、リベラルアーツはむしろ時代の要請に従順でありすぎた大学の反省として掲げられた理念である。19世紀後半、ドイツの専門化した研究大学院の興隆に脅威を感じたアメリカの大学は、植民地時代からの伝統であった人格主義的な教養教育から科学的な専門教育へと大きく舵を切る。1862年の土地付与大学法も、州立大学による農工応用科学の発展を後押しした。ところが、ドイツの科学主義が第一次世界大戦という非人間的で反文明的な帰結に至ると、一転してリベラルアーツの意義が再認識されることになる。人間や文明についての批判的な省察、時代の洞察と政治への市民参加などが大学教育の主要な課題として復権したのである。

こうした振幅はその後も繰り返され、第二次世界大戦や東西冷戦の後には、行き過ぎた科学偏重や西洋文明至上史観を矯正する方策として、リベラルアーツの重要性が見直された。その限り、リベラルアーツもまた変化する時代への対応の一端であったと言えることができるが、その対応は常に、時代を超越する根源的な人間理解に立脚した現代社会への反省と批判を旨としている。

戦後日本に導入されたリベラルアーツ教育もまた、本来

ならば戦前までの挙国一致体制への批判として構想されたはずである。元ハーバード大学学長コナントによる『赤本』もまた、古典的な少数者のためのエリート教育から、民主社会を担う平等な市民のための一般教育への転換を強く求めていた。しかし、日本の大学界ではそれが理解されず、専門主義の圧力で「一般教養」へと格下げされ、教員組織も授業内容も旧来の焼き直しとなってしまったことは、よく知られているとおりである。

3. STEAM?

リベラルアーツの意義は、現代アメリカの大学教育においてもけっして広く受け入れられているわけではない。大学の出口すなわち卒業生を受け入れる企業ではその意義が十分認知されているものの、入り口すなわち入学者の目線からすると、むしろSTEM教育の方が具体的に魅力的に感じられるようである。リベラルアーツの輪郭や実体は、高校生には掴みにくいだろう。それは、リベラルアーツが哲学や文学や歴史といった特定の「文系」科目を指すものではないからなのだが、ここではその説明は省かざるを得ない。

代わりにわかりやすい例としてしばしば引用されてきたのが、2011年にスティーブ・ジョブズが行った講演である。亡くなる直前の天才は、人の心を楽しませるような優れた製品を作るには、テクノロジーだけでなくリベラルアーツの学びが不可欠であることを、みずからの体験を織り交ぜつつ語って多くの共感を得た。

だが、もう一度立ち止まって考えたい。ジョブズの講演は、あくまでも消費者の購買意欲をそそるような魅力的な商品を開発するにはどうしたらよいか、という話である。シリコンバレー系のエンジニアの発想で、その出発点にあるのはリベラルアーツではない。ジョブズはそこで、書体美など狭義の「芸術」だけでなく、より広い「学芸一般」を意識していただろう。そうであるにしても、人文科学や社会科学がいわばテクノロジーや大量消費社会の目的に奉仕するかのような構図では、リベラルアーツを語ったことにはならないし、その意義が認識されたことにもならない。

日本では、2018年以来経済産業省や文部科学省から発信された文書で、STEMにAを加えたSTEAMという概念が称揚されてきた。これも今世紀に入ってから主にアメリカの初等教育分野で使われるようになった単語

だが、日本では「文理融合」と括られる大学の「総合知」をスマートに表現したものとして流通している。

ここでも問題は同じである。大学教育の基本がSTEMすなわち「理」にあるとされ、「文」にはもっぱら「理」を補完し拡充し効率化する役割があてがわれている。あたかも、殖産興業と国力増強という明治以来の国家目的が再び顔を出してきたかのようである。

いや、そういう学問も確かに必要だろう。政府が現下の需要を満たし、差し迫った危機を回避するための方策を奨励することも理解できる。だが、先に引用した歴史的教訓を振り返ると、まさにそういう目先の要請に従わないところに、リベラルアーツの意義があることも理解できよう。時代を超えて人間や社会のあり方を批判的に考える基礎的な能力を養うことは、結局は国家の善にもつながるはずである。ここはひとつ、政府も大学も少し蒸気（STEAM）を逃がして頭を冷やしてはどうか。

4. Society 5.0 ~

同じ文脈で論じられてきたのが、「Society 5.0」という言葉である。これは、2016年に内閣府が策定した

「第5期科学技術基本計画」の中で示され、これを文部科学省が新しい時代に向けた「人材育成」の基本的要請として展開した文書に登場した。

疑いもなく、こうした基本計画の策定には多くの知恵と労力が注がれたことであろう。Society 5.0という言葉は、すでに多くの大学で現実的な教育課程の課題として認知されている。わたしのいる大学でもデータサイエンスの全学的な強化に乗り出しており、その知識や技能がこれからの市民に不可欠であることも首肯する。

だが、今さらのようでも申し訳ないが、このキャッチフレーズはいただけない。内閣府や経団連の説明には、「狩猟社会(Society 1.0)、農耕社会(Society 2.0)、工業社会(Society 3.0)、情報社会(Society 4.0)に続く、新たな社会」とある。なるほど。Society 5.0は、仮想空間と現実空間の融合、ロボット、人工知能(AI)、IOT、ビッグデータなどの概念によって特徴づけられるという。

たしかに、この「新たな社会」は、情報産業にとっては時代を劃すべき巨大なビジネス・チャンスを意味するに違いない。しかし、別の視点からすると、これは情報社会の延長の一局面に見える。たとえそれが情報雪崩

(information avalanche) と呼ばれるほど膨大な量を扱うとしても、より大きな歴史的視点ではなお情報社会の発展形態にすぎないのではないか。なぜそれがSociety 4.1や4.2でなく5.0なのか。4.0から5.0への移行は、狩猟↓農耕↓工業↓情報という各ステージの間と同じほどに大きな変化なのか。これは歴史認識や世界観や時代区分に関わる問いなので、STEMがその答えを提供することは原理的に不可能である。

1.0は「狩猟」社会、2.0は「農耕」社会、と並べるなら、5.0は「何」社会なのか。「新たな」社会、「創造」社会、「未来」社会、「人間中心」社会などは、事実の描写であるより願望の表明だし、先行する四段階との違いも見えない。「先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れ、経済発展と社会的課題の解決を両立していく」という説明は、実のところ狩猟社会にも農耕社会にも当てはまるので、特に目新しくもない。人文科学や社会科学の視点があれば、このような文章が公表されることはなかっただろう。

「Society 5.0」という言葉は、海外ではまったく使われていない。この言葉を取り上げた論文もあるにはあるが、

それは「日本の」この概念を論じたものである。海外でもよく使われているのは「Industry 4.0」だが、こちらは産業革命の中の「第四次」なので、日本の数え方に翻案すれば「工業社会」の小数点第一位(3.4)ということになるだろう。わが国が果敢に発信した新しいキャッチフレーズは、国際的な信認を得るにはほど遠いように見える。

5. 文理融合？

最後に、「中央教育審議会大学分科会」などが唱える最近のキャッチフレーズは、「文理融合」である。その理念にはもとより大賛成だが、それと「分野横断的な学び」が同列に並んでいるのは奇妙である。分野を越えた学びは、一文字で括られた「文」と「理」の間にだけ起きるのではない。人文科学と社会科学の間でも、あるいはその内部でも、十分に起きる。まさにそれがリベラルアーツの理念であり経験である。

「文理融合」だけでは、理系のない多くの私立大学では分野を越えた学びが不可能ということになるだろう。伝統的なリベラルアーツ大学では理系分野も大切にされるが、小規模であることを身上とするため、特定分野の拡大

は要らぬ不均衡を招く。

諸会議の提言を見る限り、この看板の下にある現実的な関心事は、理系学生の数を大幅に増やすということである。すると高校は、さっそく「理系コース」を増やして時代の要請に直線的に対応しようとするだろう。かくして、「分野横断的な学び」という本来の目的はいっそう遠くなるばかりである。

大学は、学生に批判的思考の大切さを学ばせるところである。もし「こはい先生」が今に生きていたら、何と云うだろうか。